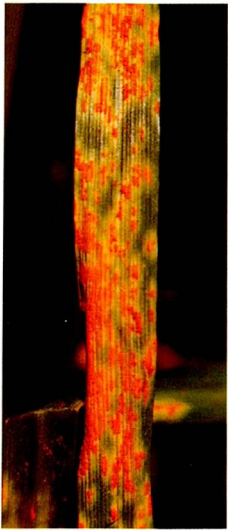


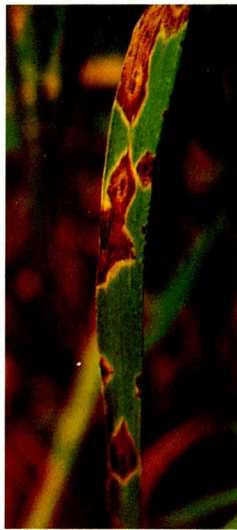
イタリアンライグラスの主要病害の診断と防除のポイント(2)

雪印種苗(株)千葉研究農場<西原>



冠さび病

Puccinia coronata
f.sp. *lolii*

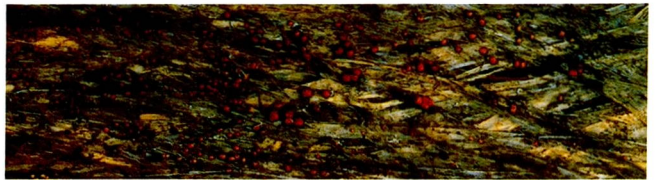


蛇紋病

Ascochyta desmazieresii



葉腐病 *Rhizoctonia solani*



雪腐褐色小粒菌核病

Typhula incarnata

●**冠さび病** 秋播きのイタリアンライグラスでは、年によって年内にも激しく発生する。翌年、気温が上がると共に再び発生し、梅雨期に急速に広がり、決定的な被害を受けることがある。本病は葉に最も目立ち、病菌に感染すると、その部分に先ず赤味を帯びた、小さなはれ物ができ、それが次第に盛り上がり、やがてその表皮が破れ、中から橙色の粉が現われる。はなはだしい場合は地上部の至る所からその粉が吹き出し、やがて株は弱って枯死する。被害を受けた株は生草収量が減り、飼料成分は劣化し、更に家畜の嗜好性も落ちるので、被害はきわめて大きい。本病は品種間で抵抗性の差があるので、品種の選択に注意を払うことがたいせつである。また極端な早播きや、窒素の過用も激発の誘因となるので避けねばならない。

●**蛇紋病** 本病が目につくのは梅雨末期以後で、そのあとイタリアンライグラスの生育末期にかけて蔓延する。その期間は短い、被害は無視できない。本病は主として葉に発生し、その病斑は楕円形またはひし形で褐色であるが、中心は濃く、その回りに濃淡の紋理が現われる。病斑の大きさは、通常、長径0.5～1 cm程度であるが、近接したものが合わさって、蛇紋状の紋様を描く。葉縁に生じた病斑が連なると刀の焼刃の模様となる。病斑面には微小な黒粒点が散生する。本病の防除法は、まだ試験されたものがない。

●**葉腐病** 初夏から秋にかけて発生し、とくにその雨季に蔓延する。真夏には新しい感染は停滞するが、高温と乾燥のため罹病株は一層衰弱し、はなはだしい場合は再生不能となる。

葉腐病は初め地面に近い草むらの中から発生し、次第に上方に蔓延して葉をはじめ地上部のすべてを侵す。本病に侵された葉や葉鞘は先ず灰緑色、水浸状となり、ゆでたように軟化し、直ちに崩れてゆく。そしてその表面にくもの巣状の菌糸がからまり、あるいは気中に伸び、枯れた葉を綴り合わせながら広がってゆく。枯死葉上の菌糸はところどころで集まり、茶色の丸い塊(菌核という)となるが、これは容易に脱落して消え失せる。葉腐病による被害を軽くするには、先ず草地の繁り過ぎをおさえるよう、混播草種の組み合わせを考え、刈遅れを避け、施肥を考えるなど、きめ細かな配慮が必要である。

●**雪腐褐色小粒菌核病** イネ科牧草には5種類の雪腐病がある。イタリアンライグラスはそのいずれにも“最弱”の部類に属する。そのうちイタリアンライグラスに最も目立つのはここに掲げる褐色小粒菌核病である。消雪後、雪腐れになった茎葉の上に飴色の小さな塊(菌核)ができるのが特徴である。この塊は日がたつと固くなり、表面のつやも失せ黒ずんでくるので、融雪直後に調べるがよい。その時点で菌核が黒いのは、黒色小粒菌核病である。播種適期に遅れないことと、抵抗性品種を選ぶことが防除のポイントである。